

あの夏の日から

建月 創始

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夏の花火大会から付き合い始めた大学生ようちかのお話です。

あの夏の日から

目

次

あの夏の日から

それは、高校三年生の夏、沼津の花火大会だつた。

この日はA q u o r sみんなが久しぶりに集まつた、2年生のみんなとは毎日顔を合わせてるけど、卒業してしまつた年長組とは本当に久しぶりに顔を合わせた、なんだか、久しぶりに会うと少し気まずさなどがこみ上げてきて、なんだかおかしかったのを今でも覚えている。

それで笑つて、前と同じような関係に戻つたのも。

そして、みんなで祭りを回つた、とつても楽しくてワクワクが止まらなくて、私は千歌ちゃんを独占してみんなと来たはずなのにほぼ二人で回つた。

でも、なんだか千歌ちゃんは元気がなくて……なにがあつたのかなあ…?

私の心配事を切り裂くように、スピーカーからアナウンスが流れる。

『まもなく、花火大会が開始します』

「わっ!! 千歌ちゃん!! 花火大会始まっちゃう!! はやくみんなのところに行かないと!!」

場所はきっと鞠莉ちゃんがオハラ家の力で良い場所をとつてくれてるはず!!
そう思つて、千歌ちゃんの手を引こうとする。

しかし、千歌ちゃんはそこから動かなかつた。
静かに俯いて立つてゐる。

「……どうしたの、千歌ちゃん…？もしかして……楽しくなかつた？」
「ち、ちがく…て！その……えと、えと……うんと…」

千歌ちゃんはそう言うとまた俯いてしまう、本当にどうしたんだろう、そんな俯いて
ちや、いつも元気な千歌ちゃんの顔が台無しだ。

こりや、しつかり聞き出さなきやいけないでありますな。

「ちーかちゃん、本当にどうしたの??」

私は小首を傾げ、千歌ちゃんの顔を覗き込むように見る。
泣いていた。

その瞬間、心臓がきゅうつ、となるのを感じた。
愛おしい。

この目の前にいる幼馴染の女の子がたまらなく愛おしく感じた。

そう感じる前に私は千歌ちゃんを抱き寄せていた。

そして、頭をポンポン、と叩きながら、こう呟く。

「全く…どうしたの？このお嬢さんは……この渡辺曜、なんでも聞くであります」

抱き寄せられた胸元で泣いていた千歌ちゃんは少し鼻をすすりながら、こう聞く。

「本当？ほんとに本当？変だつて思わない？」

「何年一緒にいると思つてるのさ……なにがあつても、私は千歌ちゃんのことを変だ、なんて言わないよ」

「そつか、えへへ……じゃあ…えいっ」

ドツカーン…と大きな音がして、空に丸い花が咲いた。

しかし、私はそんなことを気にしている暇なんてなかつた。

キスをされた、目の前の女の子に、幼馴染に……千歌ちゃんに。

私はそんな千歌ちゃんのキスに一生懸命応えるために、しつかりと唇をくつつけ直す。

そんな一生忘れられない思い出になるであろう時間が過ぎ去る中、後ろでは大きな音と共に花火が上がつては消え…：上がつては消えていく、私は初めて嬌さ、というものを感じたのだろう、心臓がドキドキして、何度も何度もきゅう…ってなつて…：本当に、こんな幸せな時間が本当に永遠に続いてしまえばいいんだ、心からそう思つた。しかし、そう思うのも悲しく、私達は唇を離す、そして、千歌ちゃんが一步下がり、はにかみながらこう言う。

「私、高海千歌は、渡辺曜ちゃんのことがだいっだいっ!!!だーい好きなんだ!!!!」

その元気な告白に私はこう言い返す。

「私のほうがもつと、もーっと!!! 大好きだもんね!!!」

「むーそんな」と言うんだ…へーじゃあ私はよーちゃんの好きなところ上げるもんね!! んとね、まず可愛い!!」

「いや、可愛いって…えへへ…そんなそんな…じゃなくて!! 私は千歌ちゃんの笑顔が好き!! 太陽みたいに笑うその笑顔!!」

「て、照れるじやん…やめてよ……えっとね、運動神経がいい!!」

「えつ、そこ好きなところって言う?! ちょっとズレてる気が……それで言うなら私は千歌ちゃんのちょっと不器用なところが好き!!」

「んーそれは褒められるのかな…?? でもでも!!! 私のほうが……」

結局私と千歌ちゃんは花火の打ち上げが終わるまで花火を無視して、お互いの好きを高めあつた。

この会話を聞いた人はいなかつただろう。

皆、空に上がる花に夢中だ。

ある一人を除いて。

「まずい、まずいわよ!! 何よこれ!! 尊すぎるわ!! 一向に来ないもんだから探しに来たら何よこれ……あ、待ってインスピレーションがつ!!! あの二人で曲作れるわよ!!! 新曲はあの二人のイメージで決定ね!!」

そういう桜内梨子は鼻から流れ落ちそうな血をティッシュで拭き取り、（新刊の同人誌もかけそうな勢いだわ。）と、その場をあとにしたのであった。

そして、私、渡辺曜と高海千歌は晴れて付き合うことになつたのであります。

そして、その日から約1年がたつた。

「千歌ちゃん、今日何講義目??」

「今日は…私は1と5だよ〜」

「げ、1は取つてるけど5じゃなくて6取つてる……お互い暇ができちゃうなあ、んー私はカフェで暇潰すかなあ」

「ええ〜でも千歌今日の5講義出なくとも……」

「だーめ、少しでも首を絞めるようなことをしちゃ駄目なんだよ??まあ放課後どこか行こうよ、最近流行りのタピオカでも…」

「たびおか!!うんうん!!行く!!今日の講義頑張る!!!」

「よつし、それじやあ今日の予定は決まり！お互い頑張りましょー！」
「ヨーソロー!!」

「ちよ、それ私のセリフ!!」

へへへ、と笑つて玄関から出ていく千歌ちゃんを追つて、私は玄関を開ける、今日も

幸せな時間に全速前進!! 敬礼!!

私と千歌ちゃんは今、都会の大学に入学して、二人でルームシェアをしながら大学に通っている、アパートの家賃は、二人が大学に慣れるまで、という期間で私のお母さんと千歌ちゃんのママが出してくれている。

といつても、ほとんどその条件を母親二人が忘れているため、忘れたままでいてくれたら嬉しいんだけど……。

しかし、一応お互いにバイトはしている、最初は両立が難しかつたけど、今じゃ慣れてしまつて、なんともない。

そして、今日は久しぶりに二人共バイトがオフなのだ、素晴らしい、こんなに素晴らしいことはない、千歌ちゃんと放課後デート、千歌ちゃんと放課後デート、頭の中はもうそれでいっぱいだ。

講義の話など適当に板書をとつただけで、全く理解などしていないに等しい、そんなことよりもデートなのだ、デート。

そのことを考えるだけでニヤけが止まらなくなり、必死に抑える。

もう付き合つて1年だが、まだこれの抑え方を私は知らない。

講義が終わつて、すぐに千歌ちゃんのもとへと向かう。

きっと待たせているだろう、急がなければいけない。

「千歌ちゃん、待つ…！」

千歌ちゃんが大学生の男に絡まれていた、まあ、可愛いからしようがない、しかし、千歌ちゃんが困っている、これは成敗しなくては。

「ねえ、本当に、ちょっと遊ぶだけじゃん、なあ？」

「えと、その、本当にやめてください…」

「悪くはしないか…あ？」

私は千歌ちゃんに伸ばした男の手を掴み、睨む。

「あの、嫌がってるんでやめたたらどうですか？それにこの子は”私の”モノなんで」「は？なに言つて…」

「離れる」

「はっ、ひい…！」

そう、わかりやすく男は怯えるとそそくさとしつぽを巻いて逃げていった。

ふう…疲れたであります、低い声を出すのはいつになつても慣れないなあ。

「よーちゃん!!」

その声が聞こえる頃には千歌ちゃんは、私の胸に飛び込んできていた。

「怖かった…怖かつたよ…よーちゃん…」

「うんうん…怖かつたね、大丈夫だよ、千歌ちゃん、大丈夫大丈夫！」
「うん…」

今日は普通に家に帰ろうか、と私は千歌ちゃんに言つて、千歌ちゃんはそれを首を縊にコクコク、と振り、了承する。

はあ…せつかくのオフが台無しであります…。

心の底からあの男を恨む心があるが、千歌ちゃんが横にいるならいいや、と思い、そんな記憶はさつきと頭から削除する。

さて、明日は私はバイトだあ…千歌ちゃんは…オフだつたつけ、うーん今日みたいなことがあるかもって思うと、心配だなあ…。

つて…ダメダメ!!こんなことはもう忘れる!!よし!わすれた!!もう忘れた!!
と言うだけで消せるなら苦労はしないが、私は消したことにして、千歌ちゃんの手を強く握り返しながら家路についた。

千歌視点

それじゃあ、行つてくるであります！何かあつたらすぐ連絡してね！とよーちゃんは元気に玄関の前に立つて敬礼をする。

「行つてらっしゃいませ!!我が家の船長!!」

と、私はよーちゃんに言葉を返して、にへらつと笑う。

その私の笑顔にどこか、ホツとしたような表情を浮かべ、私の頬に素早くキスをする、私がびっくりしているのを面白がっているのか、よーちゃんはニコツと笑い、玄関から飛び出していった。

「もう、ほんとに可愛いんだから…よーちゃんは」

私はよーちゃんにキスされた所を少しさすりながらニヤニヤとする。自分でも分かるぐらいに、顔は紅潮していた。

それを見てよーちゃんは笑ったのだろう。

なんだかそう思うと気恥ずかしくなる。

リビングに戻り、テレビを一人で見る。

テレビに映っているのは、世間がキャーキャーと黄色い声援を送っているイケメン俳優だ。

正直こんなイケメンより、よーちゃんの方が何倍もイケメンだし、何百倍も可愛いと私は思う。

昨日のよーちゃん…かつこよかつたなあ……でも、助けられちゃつたし……自分の身は自分で守れるようにならないと……。

そう思いたち、私はまず梨子ちゃんに連絡する。

プルルルツプルルルツ、という短い連続した電子音が2コールぐらい鳴るとプツツと
言うような小さな音とともに声が聞こえる。

『うん……どうしたの？ 千歌ちゃん』

「あ、ごめん、起こしちゃつたかな…？」

『いや、大丈夫よ、少し昨日夜ふかしちゃつただけだから…』

と、言う梨子ちゃんの言葉の後に小さく呻く善子ちゃんの声が聞こえた。
あう……つと思いながら、私はちよつと顔を赤くする。

まあ付き合ってるならそれぐらいするよね、うんうん。

『……オッホン、ところで何？ 何かあつたの？』

「あ、そうだ、えっとね、ナンパにあつたときつて梨子ちゃんどうしてる…？ 善子ちゃん
がどうしてるかでも良い」

携帯の奥で梨子ちゃんがふむ…と声を出す。

そしてこう切り出す。

『さてはしつこいナンパにあつたわね？ 大丈夫？ 亂暴されなかつた？』

流石、鋭い。

「う、うん、そこはよーちゃんが助けてくれたから」

『流石曜ちゃんね…それで？ 曜ちゃんが守ってくれるならいいんじゃないの？』

「いつもよーちゃんが近くにいるとは限らないからさ～」

へへへ～とニヤつく、昨日のことを思い出すとついニヤけが止まらないくなる。

その私の様子に梨子ちゃんはやれやれ…というようなため息をつき、こう言う。

『なるほどね、まあいいわ、どんなことから喋ればいいの?』

『まずは断り方…かな』

『えっとね、そもそも私はナンパに合うことが少ないから、あんまりしつかりとは言えな

いけど……』

『いや、それはないでしょ』

『いや、無いのよね、本当に』

「あ～まあ梨子ちゃんは高嶺の花つてところあるから…守り硬そうだし」

実際、学校が統廃合されたとき、学校に秘密裏（？）にファンクラブが出来ていたが、誰も告白どころか、近づくことすら恐れ多いというような風な空気があった。

『……まあ否定はしないわ、まず私は相手の方を見ないわね、視線を使って、興味のないことを示すわ』

「それでも食い下がつてきたら？」

『んー、睨む？』

『だいぶハードル高いよ…』

『まあ千歌ちゃんがやつたらただ可愛いだけね、ふふつ』

「もうつ!!」

私は梨子ちゃんがからかつてきたことに少し照れながらそう言う。
少し、はにかんでから梨子ちゃんはまた話を始める。

『ごめんごめん、えーとね、よつち・善子ちゃんはね、まず堕天使モードになるわね、あとでちょっとその様子の動画送るわ、面白いわよ』

ふふふつ、と笑う梨子ちゃんの後ろで少しガサガサつと音がした。

善子ちゃんが起きたのだ。

『……何……面白がってるのよ!!!』

『きやつ!!!』

『けーしーてー!!お願い!!けーしーて!!』

『嫌よ、私の思い出なんだもの』

そこからわちやわちや、と面白おかしい会話をするのを聞いて、あ、これあつち側につながるな、と私は勘付き、それじやあね、と電話を切ろうとする。

『あ、うん!またなんかあつたら相談してね!!ああ!もう!そこはだ……め……んつ//』

「はいはい、楽しんで~』

私は邪魔しないようにそそくさと通話を切る。

それにして、あの二人はどこまで行くんだろうか……っていうか善子ちゃんの行動力すごい、昨日学校終わってからすぐに梨子ちゃんの家に行つたのだろうか、すごいなあ……。

「とりあえず、聞いたことメモしとかないとね、えっとメモ帳メモ帳……」

幸い、近くにあつたメモ帳とペンを私は手に取り、カリカリと書き込んでいく。ついでに二人はお盛ん、とも。

「ふあ～……眠くなつてきちゃつた……このまま……寝ちゃおう……」

そうして、私は遅めの二度寝に意識を落としたのであつた。

曜視点

今日は珍しく早くバイトを上がれたため、昨日飲めなかつたタピオカドリンクを帰り道に買って、千歌ちゃんと家で一緒に飲もう、と思つた。

私はミルクティー、千歌ちゃんはカフェオレだ。

紙袋に入れてもらつて、手にさげて、駅に向かう、電車に乗つたとしても、降りるのはすぐ近くの駅だ、問題ないだろう。

いつもは混んでいるが、時間が時間なため混んでいなく、とてもスピードイーに買う

ことができた、少し上機嫌だ。

歩いていると、頬を汗が伝う。

「あつついなあ……夏だねえ！」

そんなことを一人で呟く、えつと、沼津の花火大会はいつだつたつけ、今年も多分A
q o u r sみんなで集まるだろうから……ん、わがままを言うと、千歌ちゃんと二人き
りで今度はしつかりと花火をみたいであります……。

そんなことを考えながらスマホで軽く調べる。

もう1週間前まで迫っていた、つまりこれは、私と千歌ちゃん、二人が付き合い始め
てもうすぐ1年だということを示していた。

うんなかなか1年という実感が湧かない：毎日が幸せすぎて時間が流れるのが早
すぎる……。

ふへへ、つと変な笑いが出る、そういうしているうちに、駅に着き、少し電車を待つ。
数分待つとホームに電車が入ってくる。

私はそれに乗り込み、空いてるはずのない座席を見てうんざりしながら吊り革に手を
かける。

そして、目的地の駅に着いて、ホームに出る。

あとは歩くだけだ。

一応紙袋の中を確認する。

うん、少し結露して水滴が出てるけど、問題ないはず。

早く千歌ちゃんに会いたいためか、無意識的に私は少し早歩きで歩く。そして、ものの数分でアパートに到着する。

慣れた動きで部屋の鍵を開け、ドアを開く。

「ただいま……ん？」

いつものおかえりの言葉が聞こえないことに少し疑問を覚え、とりあえずタピオカドリンクを冷蔵庫に入れ、リビングのドアを開ける、そこにはソファで体を丸めてちっちゃくなつて寝ている千歌ちゃんがいた。

一瞬天使かと空見したが、しつかりと見つめると千歌ちやんだつた。いや千歌ちゃんは紛れもなく、天使なのだが。

すー・すー・と寝息を立ててている千歌ちゃんの前にかがみ、その可愛い頬をつんづん、とする。

ん…と小さい声を出して私の指を千歌ちゃんは寝ながら握る。

ちよつと……可愛すぎやしないですかね……。

私はどうしてもその目の前にいる可愛すぎる姫をキスで目覚めさせたいという衝動に駆られる。

しかし、やつていいのか……？こんな無防備な女子に、卑怯ではないだろうか……？ええい！面倒くさいことを考えない!!全速前進!!ヨーソロー！ちゅつ、と短く、その可愛い唇に口づけをする。

すると、お姫様は瞼をあげ、先程唇に感じた感覚を指で確かめるようにして、急に赤面する。

「もー！よーちゃん!!そういうのは起きてるときにしてよ!!」

「ごめんごめん、あまりにも可愛かつたもんだからさ……」

「んもう！」

私の言葉に、また千歌ちゃんは顔を真っ赤にする、赤みかんだ。

そして、私は冷蔵庫から2つのカツプを取り出してこう言う。

「昨日飲めなかつたタピオカ！買つてきたから一緒に飲も!!」

「え、やつたあ!!わあーい!!」

本当にこの反応はちつちやいときからずつと変わつていない、とても無邪氣で、本当にかわいい。

というか、久しぶりのお家デートだ、と思いながらタピオカドリンクを飲む。

飲み物と一緒に上がってきたタピオカのモチモチとした食感に、あつおいしい…と小さくつぶやく。

それに反応してか、千歌ちゃんがおいしいね！と笑う、幸せだ、心から買つてきてよ
かつた、と思う。

「あ、そうそう、沼津の花火大会、一週間後だよ」

私はばつと思い出したことを口に出す。

そのことに千歌ちゃんは少し啞然としたような顔をする。

「一週間後つて……土曜日？日曜日？」

「んとね……日曜日だけな」

「うあ……まずい……バイトのシフトが……」

「あちやく……どうしようか」

「ち、ちよつと誰かシフト変われないか確認してみる!!」

「頑張れ！」

そうして千歌ちゃんは寝室に入つて行つた、寝室からは千歌ちゃんの交渉の声が聞こ
える、声色からしてだいぶ交渉は良い方に動いてるようだ。

そして、数分すると、千歌ちゃんが飛び出してきた。

「良かつた～変わつてもらえたよお……」

「いい人で良かつたね」

「うん……ほんとにだよ……あ、バイト先にも電話しないといけないんじやん!!」

そう言うと千歌ちゃんはまた寝へ引っ込んでいった。
せわしないなあ、と思いながら私は苦笑いを浮かべる。

まあとりあえず良かつた良かつた、なんとか花火大会には行けそうだ。
また1週間後に楽しみができた、明日からはまた早い一週間がすぎる」とだろう、そ
のことに私は心の底からワクワクした。

「1週間後」

「千歌ちゃん、準備できた??」

「ああ…よーちゃん、ちよつと待つて!んしょ…んしょ…」

千歌ちゃんが一生懸命髪を結っている、その様子がとても健気でたまらない、私が手
伝おうとすると、なぜか怒るのだ、その怒った顔もかわいいけど。
髪を結い終わつたようで、千歌ちゃんが出てくる。

「どう…かな?」

いや、その小首かしげるの反則つ!!!

危うく卒倒しそうになつた自分をなんとか立て直し、可愛いよ!とサムズアップして
答える。

その私の言葉に千歌ちゃん幸せそうに笑う、それに釣られて私も笑顔になる。

今日は夏らしく二人共浴衣を着て、沼津に向かう。

千歌ちゃんはみかん色に薄紅色の山茶花の柄が入った着物で、私は水色に赤い菊の花の柄が入つたもの、帯は交換して千歌ちゃんが水色、私がみかん色だ。
不思議と帯を変えても違和感がなく、なんだかフィットする感覚がある、そのことになんだかたまらなく嬉しさを感じる。

そんな嬉しさに浸っている間に千歌ちゃんは下駄を履いて、玄関で手招きをしていた、あの顔は早く行きたくて行きたくない顔だ。

はいはい、と返事をして、手を繋いで私達は一緒にアパートを出た。

千歌視点

カラツカラツという音がとても心地良い、まるで歩いてる人みんながリズムを奏でているみたいだ。

つい一年前までの癖で歌詞を思い浮かべてしまう、乗せる曲はないのに。

少し、そのことに寂しさを覚える、二年前みんなで見たAqoursの輝き、それがもうもつと昔のことのように感じてしまつて、たまらない。

いつもはもうこんなことは考えないので、この場所、沼津という場所はどうしてもそういうセンチメンタルな考えを連れてくる。

それほど、私の沼津や内浦への想いは強かつたのだ、と、再確認する。

「千歌ちゃん!? どうしたの!?」

横から好きな人の声がする。

何故かその顔は、とってもビックリしていて……?

ありや? なんだこれ。

頬を伝う、一筋の零。

それが涙だということに気づくのに数秒かかり、急に流れたことに驚きながら急いでハンカチで拭う。

「いや、なんか前のこと思い出しちゃつて……なんか涙が出ちゃつた」

そう私は包み隠さず話す、こういうときのよーちゃんは嘘だとすぐに気づくのだ、いつもは鈍感なくせに…。

「まあ…そうだよね、最近は帰つてこれでなかつたし」

「うん、なんだかんだ都会に慣れてきたからかな?」

「そうだね、それでちよつと心配な心がなくなつたのかも」

そう言うと少しよーちゃんは空を見上げ、考える動作をする。

そんな姿すらもカツコ可愛くて自然と笑顔が溢れる。

そして私は、そんなよーちゃんの手を引き、みんなとの待ち合わせ場所に向かつた。

～曜視点～

千歌ちゃんに手を引かれ、一緒に走る、走ると言つても浴衣のため小走りに近い形だけど。

なんだかこうしていると、少し前に戻つたようでとても楽しい。

それにしても、千歌ちゃんが急に涙を流したときは本当にどうしたのかと思った、一瞬私がなにか悪いことをしたかと思つたレベルだ。

でもそうじやなくて安心した。

そうして、数分走ると待ち合わせ場所に到着する、そこにはもうみんなが到着して待機していた。

ルビイちゃんが私達に向かつて手を振る、千歌ちゃんはその瞬間ルビイちゃんに向けて全力ダツシユして行つた、そしてその後ろでは手を振つている梨子ちゃんの横で善子ちゃんが堕天ポーズ（？）をしていたりしていて、相変わらずだな、と思いながら懐かしさで胸が一杯になるのを感じる、何度かみんなで集まることはあつたが、沼津で集まるることは少ないためこういう気持ちになるのだ、と思う。

千歌ちゃんが涙を流したのもわかる気がした。

そして私は、みんなにこう言う。

「遅れたであります!!みんな!こんばんヨーソロー!!」

と。

その挨拶にみんながいつもの通りの私だ、と微笑みを浮かべながら敬礼を返してくれる。

うん、みんなも変わつてない、良いなあこの感じ、とても安心する。
千歌ちゃん二人で居るときはまた違う安心感だ。
これもまた幸せなんだなあ……と感じる。

「さて、皆さん揃いましたし、そろそろ行きましょうか」

ダイヤちゃんが少し間をおいて、そう言う、みんなそれに同意して移動を始める。
固まつて動いてるように見えて、その実はそれぞれカツブルで動いていたりする、しかし、千歌ちゃんはそんなことをお構いなしにみんなに話しかけまくっている。
横に誰も居ないのが：正直寂しい。

「千歌ちゃん、曜ちゃんが寂しがってるわよお~」

からかうように梨子ちゃんが言う、私が梨子ちゃんに視線を向けると梨子ちゃんは私にウインクをする。

全く、梨子ちゃんは流石だな。

梨子ちゃんに便乗して私は白々しくこう言う。

「ああ、千歌ちゃんが横にいないから寂しいなあ」

すると千歌ちゃんが少し慌てて私の横に戻つてくる。

「ごめん、ごめん……つい……」

「いや、いいんだよ、ちよつとからかつてみただけだから」

私はそう言つて笑いかけて、少し小声で、寂しかつたのは本当だけど、と付け加える。

千歌ちゃんは聞こえなかつたのか、子首を傾げる。

全く：一番聞いてほしいところをなんで小声で言つてしまふのか……自分でも変だと
思う。

しかし、千歌ちゃんを見ていると、そんなことはどうでもよくなり、私は千歌ちゃん
の手を握り、みんなにこう言う。

「ちよつと私達、別行動するね!! 花火までには合流するから!!」

じや、と、手を振ると、千歌ちゃんの手を引いて連れ回す。

去年と同じような展開でなんだか不思議な気分になる。

「ねえ千歌ちゃん!! 去年告白されたのってどこだっけ!?」

「ええ!? んーと、あそこの階段横……?」

「ぶつぶー！ あそこの木の下だよー！」

「ええ…??」

少し移動すると見えてくるのは石階段と大きな木、それを見て千歌ちゃんは頬を膨らませる。

「んもう!! よーちゃん!! 意地悪しないでよ!! 本当に間違えたかと思つたじやん!!」「ごめんごめん、なんか一周年で舞い上がつてゐみたい」

「もうよーちゃんはしようがないんだから」

千歌ちゃんはそう言うと、ちよつとはにかんで笑う。

その瞬間風が吹いて、千歌ちゃんの髪を揺らす、綺麗に結われた髪が風になびく、そのワンシーンはまるで映画の切り抜きのようだつた。

「綺麗だよ、千歌ちゃん」

心からの声が口には出さないつもりがつい口からそんな言葉が出る。

でも出したとしても慌てることはしない、目の前の女の子とは恋人同士なのだから。

ちなみに言われた本人は顔を真っ赤にして顔を手で覆つている。

「もう…よーちゃん……それは本当に反則だよお……」

「えへへっ！ 照れ顔いただき!!」

私は素早く携帯のカメラを起動し、千歌ちゃんに向けて、写真を撮る。

「よ、よーちゃん!! 消して!! 消してえ!!」

「やあだ！私の思い出フォルダに入れるんだもん!!」

「もう……」

可愛い、とっても可愛い。

なんだこの子は……この放つておけない小動物みたいな空気は…。

その可愛さに私は耐えきれず、千歌ちゃんの肩を掴み、そつと千歌ちゃんの唇にキスをする。

「千歌ちゃん、好きだよ」

「うん：私も」

そして、もう一度、唇を合わせ、お互い確認する必要もないほどの、好きを確かめ合う。

更に愛を深めるように、自分を相手に刻みつけるように。

そして、唇を離すと、口と口の間に糸が引く。

なんだか、その糸がこのキスを名残惜しんでいるように感じた。

「みんなのところに：戻ろつか」

「うん、えへへ」

私は千歌ちゃんと恋人繫ぎをして、みんなのところに向かつた。

「そろそろかな?」

「まだですわよ、ルビイ、落ち着きなさいな」

「で、でもお…」

「か…かわいいお顔ですわねええもう、うちの妹わあ…‥」

そう、ルビイちゃんをダイヤちゃんが抱きしめて撫でようとすると、ダイヤちゃんが雷に打たれたような動きをして後ろを確認すると、ルビイちゃんの彼女：理亞ちゃんが居た。

「理亞ちゃん!! 来てたの?!」

「さ、サプリライズよ」

「わあい!!」

そう言つたあと駆け出して、ルビイちゃんは理亞ちゃんを抱きしめる、その仕草はまだ2年前と変わってなかつた。

理亞ちゃんが居るということは……聖良さんも居るんじや??

そう思つて見回していると隣の千歌ちゃんが肩を叩いて、こう言つてきた。

「聖良さんは居ないよ、なんか理亞ちゃんが一人で行きたいって言つて聞かなかつたらしい」

「なるほど～相当会うのを楽しみにしていたと見えますなあ」

「遠距離恋愛、いいねえ！」

「千歌ちゃんもそういうの憧れる??」

「いーや？私はよーちゃんが近くに居ないと生きられないよ？」

そう言うと千歌ちゃんは私の体に身を任せてくる。

本当に、私の彼女は本当にかわいい。

「そういうの…ほんとにズルい」

「ええ〜？さつき自分でもやつたのに〜」

そうして、千歌ちゃんはニヤニヤと私を見る。

後ろから梨子ちゃんの卒倒する音が聞こえた気がするが、気にしない。

そして、花火大会開始のアナウンスが流れる。

花火大会が始まる。

2人で歩き始めた夏のあの日から、1年。

ドツカーン…という音を連れて、空に大きな花が咲く。

その心をも震わすその音は、私達の始まりをもう一度告げるようだつた。